

## 熱海「小嵐亭」

## 終の住処

中国・清朝末期の皇族・愛新覺羅載澤（1876年～1929年）が揮毫した書が、静岡県熱海市の料亭旅館「熱海 小嵐亭」に掲げられている。力強い筆遣いで「小嵐亭」と書かれている。

旅館には、庭園や池があり、書は旅館のために書かれたものではない。この地にかつてあった子爵・曾我祐準（1844年～1935年）の別荘「小嵐亭」のために贈られたものだ。

「熱海 小嵐亭」に掲げられている愛新覺羅載澤の揮毫した書

ぼ当時のまま残されている。茶室の床板は別荘で使われていたタモ材を再利用したほか、離れには勾配にわざかなふくらみを持たせた「むぐり屋根」を採用し、往年の茅葺きの雰囲気を伝えている。

祐準は壯年期、リウマチの持病に苦しみ、馬にも乗れないほどの重症で、1875年（明治8年）以来、たびたび熱海へ温泉治療に出向いていた。その甲斐あって2年ほどで快癒。その後、体験から、病弱だった明宮（後の大正天皇）の転地療養先として熱海を推薦し、88年（明治21年）、現在の熱海市役所の場所に御在の熱海市役所の場所に御用邸が造営された。祐準自身も96年（明治29年）、町場からやや山に入った土地に別荘を建て、地名を採って「小嵐亭」と名付けた。関東大震災で東京・駿河台の自邸を失つてからは、ここを終の住処に定め、多くの政治家や文人墨客の訪問を受けた。

載澤は日本の憲政制度視察のため1906年（明治39年）に来日した。その際、旧小嵐亭を訪ねたかどうかは不明だが、祐準との交流はあったのだろう。当時は世界情勢について熱く語り合つ場面があったのかもしれない。

## 清朝皇族や蘇峰と交流

（著作権の都合により非表示）

正装姿の曾我祐準（1928年11月、柳川古文書館蔵）

当時、別荘には、後に市役所の天然記念物に指定された「小嵐のシロマツ」と呼ばれる松の木が立っていた。

陸軍軍人だった祐準が北清事変（義和団の乱、1900年）に出征した際に、北京から持ち帰った白骨松の月にも旧小嵐亭を訪ね、祐準の戊辰戦争の思い出話に耳を傾けた。



料亭旅館「熱海 小嵐亭」には、祐準が晩年を過ごした旧小嵐亭の庭園がほぼ当時のまま残されている（9月27日、静岡県熱海市）



そんな旧小嵐亭に足しげく通つた客の一人に、ジャーナリストで思想家の徳富蘆峰（1863～1957年）がいた。祐準は1888年（明治21年）、蘆峰が創刊した総合雑誌「国民之友」に「日本の国防を論ず」と題した論文を匿名で発表した。軍の強化には情実的人事を排した実力本位の人材登用が重要と訴えた論文は、藩閥政府の反感を買うもので、蘆峰によれば、大いに世間を驚かせたという。祐準から多くの知識を得て、その人柄にも敬服した蘆峰は以来、自身を「曾我の門下生」と自任した。1934年（昭和9年）の正月にも旧小嵐亭を訪ね、祐準の戊辰戦争の思い出話を傾けた。

その翌年、祐準はこの庵で息を引き取った。享年93歳。蘆峰は追悼文にこう記した。

「名利に恬淡にして、陰謀、秘策などは、もっとも好まざるところであった」

種子が育ったものだ。「すっと背が高くて、白っぽくて、樹皮がむけるとちょうど緑色なんです。もう20年以上前に枯れてしまいましてが」と川原さんは懐かしく語る。

察のため1906年（明治39年）に来日した。その際、旧小嵐亭を訪ねたかどうかは不明だが、祐準との交流はあったのだろう。当時は世界情勢について熱く語り合つ場面があったのかもしれない。

「すっと背が高くて、白っぽくて、樹皮がむけるとちょうど緑色なんです。もう20年以上前に枯れてしまいましてが」と川原さんは懐かしく語る。